外郎売り

拙者親方と申すは、お立会の中に御存じのお方もござりましょうが、
お江戸を発って二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、
青物町を登りへおいでなさるれば、欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髪致して
円斉と名のりまする。
元朝より大晦日まで、御手に入れまする此の薬は、昔、ちんの国の唐人外郎
という人、わが朝へ来たり。
帝へ参内の折りから此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ冠の隙間
より取り出す。
依ってその名を帝より、透頂香と賜わる。
即ち文字には、頂き透く香いと書いて透頂香と申す。
只今はこの薬、殊の外世上に弘まり方々に偽看板を出し、イヤ小田原の灰俵の
さん俵の炭俵のといろいろに申せども、平仮名をもってういろうと記せしは
親方円斉ばかり。
もしやお立会いの内に熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるるか、又は伊勢御参宮
の折からは必ず門違いなされまするな。
お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟
玉堂造り、破風には菊に桐の薹の御紋を御赦免あって系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には正身の胡椒の丸呑み白河夜船。

さらば一粒食べかけて、その気味合いをお目に懸けましょう。

先ずこの薬をかように一粒舌の上へのせまして腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、胃心肺肝が健やかになりて薫風候より来たり口中微涼を生ずるが如し、魚鳥、茸、麺類の食い合わせ、その外万病速効ある事神の如し。

さてこの薬、第一の奇妙には舌の廻ることが銭独楽が裸足で逃げる。

ひょっと舌が廻り出すと矢も楯も堪らぬじゃ。

そりゃそりゃそらそりゃ、廻って来たわ廻って来るわ。

アワヤ候、サタラナ舌にカ牙サ歯音。

ハマの二つは唇の軽重、開合爽やかにアカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロオ。

一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ。盆豆盆米盆牛蒡。摘蓼、摘豆、摘山椒。

書写山の写僧正。粉米の生噛み粉米の生噛みこん粉米の小生噛み。繻子緋繻子、繻子繻珍。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。古栗の木の古切口。雨合羽か番合羽か。貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。

尻皮袴のしっ綻びを、三針針長にちょと縫うて、縫うてちょとぶん出せ。

河原撫子野石竹。野良如来野良如来、三野良如来に六野良如来。

一寸先のお小仏にお蹴躓きゃるな。細溝に泥鰌によろり。

京の生鱈、奈良、生学鰹、ちょと四五貫目。

お茶立ちょ茶立ちょ、ちゃっと立ちょ茶立ちょ、青竹茶筅でお茶ちゃと立ちゃ。

来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧。

狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。

武具馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具、六武具馬具。

菊栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。

麦ごみ麦ごみ三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。

あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。

向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、あれこそ本の真胡麻殻。

がらぴいがらぴい風車。

おきゃがれ小法師、おきゃがれ小法師、昨夜もこぼして又こぼした。

たあぷぽぽ、たあぷぽぽ、ちりからちりからつったっぽ、たっぽたっぽ干蛸、

落ちたら煮て食お。煮ても焼いても食われぬ物は、五徳、鉄弓、金熊童子に、

石熊、石持、虎熊、虎鱚。

中にも東寺の羅生門には茨木童子がうで栗五合掴んでお蒸しゃる、かの頼光の

膝元去らず。

鮒、金柑、椎茸、定めて後段な蕎麦切り、素麺、饂飩か、愚鈍な小新発知

小棚の小下の小桶にこ味噌がこ有るぞ、小杓子こ持ってこ掬ってこ寄せ。

おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は走って行けば、

灸を摺りむく三里ばかりか藤沢、平塚、大磯がしや小磯の宿を、七つ起きして

早天早々相州小田原透頂香。

隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう。

あれ、あの花を見てお心をお和らぎゃっという、産子、這子に至るまで、この

外郎の御評判、ご存知ないとは申されまいまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼ

う眉に、臼、杵、擂鉢、ばちばち、ぐわらぐわらぐわらと羽目をはずして今日御出

の何も様に、上げねばならぬ売らねばならぬと息せい引っぱり、東方世界の薬

の元締め薬師如来も照覧あれと、ホホ敬って、ういろうはいらっしゃりませぬ

か。